

# 博士論文の要旨

氏 名 片岡 真伊

論文題目 小説とノヴェルのあいだ ―戦後期日本小説の英訳・出版現場の探究―

第二次世界大戦後、アメリカの出版社が次々と日本の小説の英訳に乗り出し、同時代の日本小説を紹介する動きが活性化した。その原動力となったのが、アメリカのクノップフ社である。同社は一九五〇年代半ばから一九七〇年代にかけて「日本文学翻訳プログラム」を通じて、川端康成、谷崎潤一郎、三島由紀夫による小説を含む三十タイトル以上もの英訳を手がけた。クノップフ社の試みは、今日の海外における日本小説の受容基盤となった事情も関係し、日本研究、比較文学、翻訳学など各方面から研究対象として注目されてきた。だが従来の研究は、原文が英訳文においてどう省略、変化、誤訳されているのかを調べ上げることに終始したものが大半を占め、英訳・編集現場にまで踏み込み、その変貌の理由を突き止めようとする研究はみられなかった。

その解決の糸口として本研究で用いたのが、出版社側の一次史料、クノップフ社のアーカイブズである。翻訳者や編集者を含む英訳出版関係者たちの間で交わされた書簡、さらには事務手続きの書類や内部資料など、翻訳の企画立案から英訳、編集、校正、宣伝活動の様相を鮮やかに蘇らせる一次史料と共に、日本小説の原文と英訳文とを突き合わせて比較検討し、本研究では、小説を英米圏に移すにあたり、編集者や翻訳者たちが、言語・文化・文学規範の隔差をどう跨ごうとしていたのか、その「あいだ」の実相を解明することを目指した。さらに本論では、英訳における変貌の結果、クノップフ社から刊行された英訳版日本小説がどう受容されたのか、今日に至るまでの移植先での受容や伝播の諸相についても追究している。

まず冒頭の章では、全体の見取り図を提供するため、クノップフ社の編集長で、日本文学翻訳プログラムの立案者でもあるハロルド・シュトラウス(1907-1975)に焦点を当て、翻訳事業の設立経緯や、日本文学翻訳プログラムにおける翻訳状況の変遷、さらに当時の翻訳・出版現場の様相を素描した。

戦後期日本小説の英訳・出版現場の探求に先立つ、これらの前提的検討に続き、第Ⅰ部「異文化接触の磁場形成」では、小説を英米圏へ移すにあたり、言語・文化・文学規範の隔差を跨ぐために編集・出版現場でなされた工夫、変更の実態に迫った。第一章では、想定読者が呈しかねない拒絶反応に対する防御装置、本文に先立つ導入として作成された「序文」をとりあげ、その生成の系譜を辿った。日本文学翻訳プログラムの第一作目である大佛次郎の『帰郷』(*Homecoming*, 1955)、それに続く谷崎潤一郎の『蓼喰う虫』(*Some Prefer Nettles*, 1955)の序文生成過程に光をあて、同翻訳プログラム初期段階において、序文作成者が日本の小説のいかなる部分に異質性を見出し、それをアメリカの読者にどう紹介していたのかを読み解いている。つづく第二章では、『蓼喰う虫』の会話文を英語に移した際に生じる事態・混乱の收拾経緯に目を向け、原典の特徴が消失した事件を明らかにした。さらに、谷崎の小説とダイアローグの名手とされるイギリスの作家アイヴィー・コンプトン

＝バーネットのノヴェルとの比較を通じて、会話部分をノヴェルの「ダイアログ」として読んだ際に生じる異和感を明るみにし、小説における「会話部分」とノヴェルにおける「ダイアログ」との根本的な差異を浮き彫りにした。そして第三章では、大岡昇平『野火』(*Fires on the Plain*, 1957)の翻訳・編集現場でなされた、小説の構造をも揺るがす大幅な変更、エンディングに至るまでの流れの書き換えや、サスペンスの要素をめぐる改変に着目するとともに、そこから浮かびあがる英訳現場のもう一つの側面、日本の小説の英訳だからこそ浮き彫りにされる「米語訳」と「英語訳」とのあいだに、いかなる編集の相違があったのかという問いにまで踏み込んだ。

第II部「原著の変貌と、その伝播の行方を辿って」では、第I部とは趣向を変え、原典が英訳・編集・出版過程、さらにはその受容過程を通じて変貌することを前提とし、その背後にある改変や調整、またその諸要因を論証している。まず第四章では、英語で読んだ時と原典で読んだ時とで異なる印象が生まれる主要因の一つ、視点と時制をめぐる調整・変更之光をあてた。谷崎潤一郎『細雪』(*The Makioka Sisters*, 1957)に登場する一場面、過去と現在、夢と現実が錯綜する蛍狩りの場面において、翻訳者エドワード・G・サイデンステッカー(1921-2007)とクノッフ社の編集者たちが、それらの問題にどう対峙していたのかを考察し、日本語から英語への文学翻訳において長年論議が重ねられてきた、視点と時制に関わる翻訳問題を問い直している。第五章は、谷崎の『細雪』や川端康成の『千羽鶴』(*Thousand Cranes*, 1958)などの英訳に焦点をあて、原典と英訳版とは異なる表情を見せる三要素、すなわちタイトルや表紙カバー、そして著者イメージの劇的な変貌の陰に潜む経緯や、その変容の背後にある文化的隔差を読み取っている。第六章では、第II部の総括として、川端康成の『名人』の英訳化(*The Master of Go*, 1972)に焦点をあて、その翻訳企画の立案から英訳、編集、そしてその受容に至るまでの流れを辿り、一つの作品が英訳されてゆく作業の業務過程や、出版された英訳の伝播に加わった内的、外的力学を交えつつ、小説の翻訳に関わるダイナミズムを写し出した。

以上、各章での考察を受け、第III部「異質性をめぐる葛藤から翻訳が拓く可能性へ」では、翻訳者や編集者たちが翻訳・編集過程において直面した葛藤の領域に、さらに深く分け入る。第七章では、三島由紀夫の『金閣寺』(*The Temple of the Golden Pavilion*, 1959)における隠喩表現の翻訳をめぐり、翻訳者アイヴァン・モリス(1925-1976)と編集者シュトラウスのあいだで繰り広げられる指摘、反駁、自己弁護、指南、応酬などの編集劇を通じて、両者の読みの深淺、さらには彼らが直面した葛藤の実像を描き出した。つづく第八章では、躊躇なく大幅な改変が行われた大佛次郎の『旅路』(*The Journey*, 1960)の英訳編集現場に目を向け、原典の特徴や味わいが強く滲み出る箇所の数々があえて削除、改変された内実を解明し、翻訳文学としての脆さを孕んでいたにもかかわらず、『旅路』が英訳された経緯を示した。第III部の締めくくりとなる第九章では、イギリスの小説家・批評家であるアンガス・ウィルソン(1913-1991)と日本小説の英訳との関わりにスポットライトをあて、日本の小説(とりわけ谷崎の『細雪』)が英訳されたがゆえに切り拓かれた、思わぬ可能性について考察をめぐらせた。

終章では、各章での考察から明らかとなった事実を改めて咀嚼したうえで、日本小説を英訳するにあたり、シュトラウスや翻訳者たちが直面した問題の根底にあったものとは一体何であったのか、その葛藤の根源や問題の焦点を究明しようと試みた。

以上の考察を通じて明らかとなったのは、従来見逃されてきた、訳文の生成段階における編集者の介入の具体相である。その編集手法の取捨選択からは、移植先における読者の異質性の許容限界を図りつつ、常に「異質性」と「同質性」の狭間を行き来するシュトラウスの姿が浮かび上がった。それと共に、これまで作家や研究者たちが掴み切ることのできなかつた日本の「小説」と英語の「ノヴェル」の各特色や差異を含む、その境界面の実相が解明された。両者の噛み合わせの悪さが明確となる一方、本論では、その差異こそが時に翻訳移植を通じて作家の発想源になるという、日本小説の英訳が新たに切り拓く局面を示すに至った。